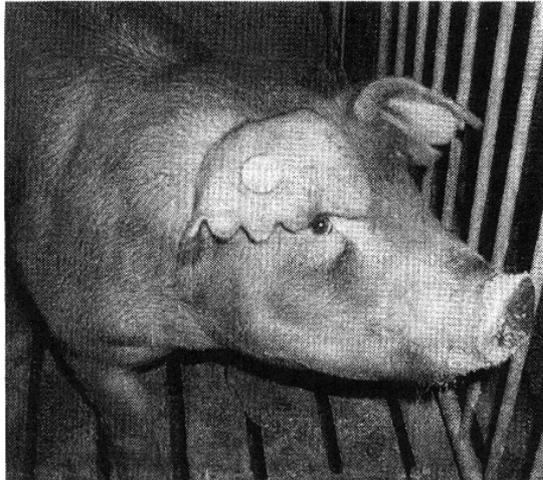


# 生産履歴管理における技術開発の動向

## 〈豚肉トレーサビリティ〉 ICチップを利用した個体識別システム

独立行政法人家畜改良センター茨城牧場



ICチップをつけた実験中の豚

近年、豚の生産から出荷までの生産履歴の記録・管理とデータの公開に取り組む生産者が増えており、国においても、生産衛生管理ガイドラインの策定・指導や、と畜場法の改正が行われ、これら取り組みの推進を図っている。さらに、任意参加ではあるが生産行程履歴JASの認定を目指してより精密な履歴の把握・情報提供に取り組む生産者も増えている。

(独)家畜改良センター茨城牧場では、これまで全国の生産者に生産履歴管理に関する国内外の技術情報を提供するとともに、当场がSPF管理された大規模GGP農場に移行したことを契機に、耳刻等の創傷による衛生リスクの軽減、効率的な飼育管理を目指して、企業が開発した個体識別用器具等の試験を行っている。

当牧場で試験中の耳票は、新しく開発された豚用耳票に防水ケース入りICチップを組み合わせたものであり、併せて装着した際に生体からDNA鑑別用試料が採取・保管出来る機能を加えている。システムの流れとしては、離乳前の子豚の耳の特定部位に専用器具で取り付け、豚舎内で投薬等の作業をする際に、小型読取機でICチップに記録してある識別番号を読みとり、パソコン上でデータ管理を行うものとなっている。

現在、畜産専用のICチップや小型読取機はなく、汎用品の中から、耐水・対衝撃・対汚損性に優れ、農場内で使いやすい物を探して試験している。この分野は日進月歩で技術的な開発が進められている。価格面では利用数で100万個という壁があり、これを超えると急激に1個あたりの単価が下がる傾向にある。畜産現場でこの技術を利用する上では、共同でシステム導入、耳票等の購入を行うことが大切である。